

---

# 花火

水上和樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花火

### 【Zコード】

N8308M

### 【作者名】

水上和樹

### 【あらすじ】

「ねえ、夏祭りに行かない？」

その一言から始まる『僕』が初めての思いに気づく話。

「ねえ、夏祭りに行かない？」

学校で、いきなりアヤちゃんに言われた。

僕はドキッとした。

なぜって、女子と一人で仲良くしゃべっている所をクラスのみんなに見られたら、バカにされるからだ。

幸運なことに廊下には誰もいなかつたけど、僕は恥ずかしくて早くこの場を離れてくて…。

「うん」

そう頷いて、教室に入つたんだ。

そんなわけで、今日僕はアヤちゃんと夏祭りに行くことになつた。

アヤちゃんは、保育園に通つていた時からの幼馴染で、小学生になる前はよく遊んでいた。

小学生になつてからは、遊ぶときは男子と女子でバラバラに遊ぶようになつたし、女子と仲良くしそうると、お前あいつのこと好きなのか？とか言われて馬鹿にされるから、こつ之間にか僕はアヤちゃんを避けるようになつていた。

「お前あんなデコ女が好きなのか？」

そうクラスメートに言われたのが避けるきっかけになつたのかもしれない。

アヤちゃんは前髪をいつもゴムで留めていて、おでこがいつも丸出しだった。

好きとかそんなこと考えたこと無かつたけど、その一言でアヤちゃんと一緒にいるのは恥ずかしいことだつて思つよくなつたんだ。

待ち合わせの時間を決めていなかつたから、祭りの始まる時間に合

わせて家を出た。

親には祭りの行くとだけ言つてある。

近所だし、毎年友達と遅くまで遊んでいるから、今更誰と行くの?  
なんて聞いてこない。

この町で行われる祭りは小さな規模だけど、屋台はあるし、組み立てられた即席の舞台で神楽が行われたりする。  
そして辺りが真っ暗になれば数は少ないけど花火が打ち上げられる  
んだ。

だから意外と観客は大勢いる。きっとクラスメートもいっぱい来て  
いると思うけど、誰が誰かなんて人ごみに紛れてわからないはずだ。  
見つかったら何て言われることか…。

十数分歩くと神社の鳥居が見えてきた。

鳥居から神社までの間に、屋台が立ち並び、神社から少し離れた所  
に舞台はある。

鳥居が一番田印になるから、僕はそこに寄りかかつて待つことにし  
た。

「遅い！」

慣れ親しんだ声が後ろから聞こえた。

アヤちゃんだ。僕は振り向いた。

「…」

そこには、アヤちゃんだけど…確実にアヤちゃんだけど、アヤちゃ  
んじやない子が立っていた。

前髪をおろしているから、まずクラスマートが言つよつな「テコ女じ  
やない。

少し天然パーマでくりくりした髪が眉毛まで隠していた。  
幼馴染みだったけど、いつも髪を結っていたから初めて見る髪型で、  
似合っていた。

そして浴衣姿。

いつも私服は男っぽくて、学校の制服が一番女の子らしい姿だったのに、これも初めてで衝撃的だった。

「…可愛い」

ハツとして僕は口を押された。思わず出てしまつた失言。今まで幼馴染みどころか、同級生を誰一人可愛いなんて思ったことなかつた。

恥ずかしくて顔がカーッと熱くなる。

僕は聞こえてなかつたかと伺う視線を向ける。

視線を向けた相手は顔を真っ赤にしてうつむいていた。僕も同じような顔をしているのかなつて思った。

アヤちゃんはもじもじしていて、いつもの堂々とした素振りがない。

…もしかして別人なのかな？

しかしどう見直しても相手はアヤちゃんだ。

彼女は顔を上げにっこり笑つた。

「嬉しい」

その瞬間、僕の胸がきゅうつて締まつた。  
なんだかよくわからないけど、少し苦しくなつて、でも痛みはなくて、熱いものが頭までせりあがつてきた。  
そして…凄くドキドキしていた。

「行こう！」

アヤちゃんは僕の手を引つ張つて歩きだした。

「えつ、ちょ、ちょっとー！」

僕は戸惑つた。

学校の遠足で女の子と手を繋いで歩いて行つたこともあるけど、今日はなぜだか凄く恥ずかしい。

でも…手を緩めることはできなかつた。

さつきよりもドキドキし始めて、まるで心臓が手を離すなつて命令しているよつだつた。

アヤちゃんに僕のドキドキが伝わるかと心配したけど、それでも手は離したくなかった。

「…きっと僕はこうじつかつたんだ。」

それからしばらくは一人で屋台を巡ってタコ焼きを食べたり、金魚すくいしたり…。

神楽も見たけど何て言つていいのかさっぱりわからないから数秒で見るのをやめた。

二人で色々巡るのは楽しかったけど、それ以上に胸がドキドキした。屋台の灯りに照らされるアヤちゃんの顔はキラキラ輝いて見えて、気付いたら見つめてしまうんだ。

アヤちゃんと目が合うと恥ずかしくて、だからアヤちゃんが他に気をとらせていくうちに顔を盗み見たりしていた。

漫画やゲームで知つてはいたけれど、やっぱこの気持ちが…。

「ねえ！」

いきなりアヤちゃんが驚いたように声をかけてきた。

「なに？」

アヤちゃんは僕に顔を寄せてきた。シャンプーの香りがする。

「あれ、同じクラスの…」

アヤちゃんが指を差す。さつきまで僕らがいた屋台だ。

そこにクラスメートが数人いる。その中にいつも遊ぶ友達を数人発見したけど、僕は誘われてない。

一人がこっちを見た。僕は思わずそっぽを向いた。

わざとらしくてこんなことをすれば怪しまれるけど、咄嗟にしてしまったのだから仕方がない。

アヤちゃんは僕の陰に隠れて盗み見ている。

「あつ…こっちに気付いたかも…」

何となく見つかりたくなかった…そして何よりも今日はなんだか一人でいたかった。

「逃げよ！」

僕はアヤちゃんの手を引いて駆け出した。

追いかけてきているかどうかわからないけど、振り返って顔を見られたくなかつたから一心不乱に走つた。

「あははははは

アヤちゃんは浴衣で走りにくそうだったけど、楽しそうに笑つていた。

僕もまるでお姫様を救つて脱出する物語の主人公のよつで、楽しかつたからアヤちゃんと同じように笑つた。しばらく走ると、さすがに疲れてきたし、暑くなつてきたから足を止めた。

「誰も追いかけてないな

「ていうか誰か追いかけてた?」

「… わあ?

僕とアヤちゃんは目を合わせて吹き出した。

「あははははははははははは

無我夢中で走つていたけど、気付けばそこは近くの公園だった。ベンチに腰をおろす。

すると、計つたようなタイミングで大きな破裂音がして夜空が輝いた。花火だ。

「わあ!

僕らは揃つて声を上げて空を見上げた。

真つ黒な空が、様々な色の花に何度も染め上げられる。

一発一発花火が上がるたびに、僕らは声をあげて手を叩いて飛び上がつた。

今まで何度も見たけど、こんなに楽しくて綺麗な物だとは知らなかつた。

そしてそれは一緒に見る人がアヤちゃんだからなんだ。  
さつき気付いたけど、これが恋なんだな。

いつかは僕も恋をするんだろうっておぼろげに思っていたけれど、恋をするだけでこんなに楽しくなれるなら、恋人同士になれたらもっと楽しいんだろう。

告白の仕方はわかっている。たった一言を相手に言えばいいだけだ。でも、ロマンチックなタイミングで言わないダメなんだ。毎年この花火大会の最後は、夜空全てを覆うような大きな花火で終わる。

この最後の花火が上がつたら、アヤちゃんに言おう。

僕の決意なんて知らずに、アヤちゃんは無邪気にはしゃいでいる。僕の心臓は破裂しそうなほどドキドキしていた。花火が上がるたびにドクンッて心臓が跳ね上がる。

「凄く綺麗だね！」

アヤちゃんが僕に笑いかけた。それだけで不思議とあれだけつるさかつた心臓が落ち着いて、決意だけが残った。そして次の瞬間、大きな花火が夜空の全てを覆つた。

(後書き)

こんな初恋したいなと妄想しました。  
優しい気持ちになってくれればと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8308m/>

---

花火

2010年10月11日21時51分発行